



静脩

1995年 1 月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 31, No. 3

日本における科学の歴史資料保存

理学部教授 佐藤 文 隆

1. 自然科学と歴史

日本においては近代科学の歴史が浅いせいか、これまでは、あまり自国の科学の歴史というものには関心がなかった。日本では、自然科学の話題といえは“最新の情報”にばかり目がいって、“過去”は絶えず消耗品のように屑かごに入っていくようなイメージが強く結びついている。それに対し文系の学問には「過去を振り返ってばかりいる」とか、「歴史の反復ばかりしている抹香臭い学問だ」とかいうイメージが結び付いている。そして理系の人間は過去を振り返ってばかりいる文系を“創造的でない”などといって、優越感を味わったりもするわけである。それが科学記事のマスコミでの報道の姿勢にも如実に出てくる。

「それは古い」というのは自然科学では軽蔑語であって、「古くからあるから重要」という視点はない。確かに物理学等の数理的に表現できて、実験で何回も再現できるような現象を扱っている分野では、知見は瞬く間に万人のものとなる。そしてその過程で、発見者の動機や意図におかまいなく学界の中で進歩・拡大していく。こうなると研究者にとっても過去にこだわりが生じないのは当然である。もちろん知識の累積の意味で過去に何が知られているかには関心はあるが、それは時の学界流に整理された「学術情報」であって背後の人間やその生きざまにまで関心が及ぶことは少ない。確かに「アインシュタイン学」という科学史の分野があると言われるほどスーパースターについてはそういうことはある。しかし、日本のスーパースターについてはまだ存在し

ない。また量的にみても科学研究が常人の職業になった現実に見合った歴史というものもない。

自然科学では歴史を省みないかのように云うと、自然科学には人名を冠した専門用語が多いではないか？という声が出るかも知れない。確かに、数学、物理学、化学などの用語にはそういうものが多いと思う。これは後に広範な分野で使われるようになった概念や現象には出来るだけ発見時の動機や位置付けが見えない中立的な意味しか発しない用語が歓迎されるのでそうなるのだと考えられる。仮に名前を冠されている人物がタイムワープででも現在にひょいと現れたら本人も理解できないようなことに自分の名が冠せられていることに驚くであろう。こういうわけで生の人物や歴史を尊重して名を冠しているわけでは必ずしもない。

2. 日本での科学のイメージ

日本では、自然科学はとかく“明るく、新鮮で、健康で、単刀直入で、清潔で、公明正大で、屈託がない”ものとして描かれる。それは大変褒め言葉のようであるが、それは同時に“潤いがなく、影がなく、平板的で、余韻がなく、底が浅く、単細胞である”というイメージと同居してるのであって、本当は尊敬もされていないのである。世の中全体が近代の単純な進歩観念に深刻な反省をしている昨今でもいまだに「ひたすら進歩する」「価値あるものは未来から」といううたい文句を唱え続けている。そんなのはいまや自然科学だけぐらいになっている。そして、この“明るく、屈託のない”自然科学に対して人々は無言のうちにもある種のうさん臭さを感じ

始めているのではないかと考える。

自然科学の社会的存在がかくも大きくなった現在、これは深刻な問題である。勿論、今でも単純な進歩を信じて疑わないという“うさん臭い”研究者の大群をどう考えるかという大きな問題もあるが、より重要なのは研究の実態と社会的なイメージの乖離を小さくする努力であると考ええる。自然科学の研究者といえども特殊な人間でないから大抵は人並な社会思潮のもとに生活しているし、研究の現場でも絶えず過去を振り返りながら前進しているのである。その意味では文系と理系でそれ程の違いはない思うのであるが、外から見た自然科学のイメージにはこういうものが多いし、研究者もあらためて「科学の性格」などを問われるとそういうステレオタイプの“明るく、屈託のない”科学のイメージを強調してしまうのである。

3. 科学のイメージに歴史で潤いを

科学のイメージの現実とのこの乖離を小さくするために有効な手段に特効薬があるわけではないが、なされるべき様々な方策の一つに、科学の歴史についての関心を高揚することがあると考える。社会一般でと研究者の間でと両方においてである。人間の創造的営みの一つとしての科学と、社会制度の一つとしての科学の両面における歴史がさまざまに語られることである。新参者の科学も他のもろもろの人間の営みと共存して社会の重層構造を構成しているさまを描くことである。

科学とて無傷でもなんでもないし、他の諸々の人間の営み、創造活動、と同様に血まみれの歴史を背負っている。ましてや知的な意味での影響でも、技術を通しての社会への影響でも、巨大なシステムと化した科学では隔離された楽園など存在しない。逃避はありえず、そういう実態をみすえつつ科学の営みは進んでいくことになるのである。社会的背景の中で翻弄されてきた科学の歴史に関心が高まることは社会一般が科学の実態を認識する上にも役立つことである。歴史への関心はこの“みすえる”上に重要な役割を果たすと考えるのである。

科学の営みを無限定的に賞賛してみたり、科学の様々な過ちに動転して全て放り出してしまうのも誤りであろう。社会も科学が300年前のニュートン時代と同じでないことを認識し、批評や注文も付ける対象として捉えるようになっていくだろうと思う。

4. 科学の歴史への招待

以上のような問題意識の基に、日本での科学の歴

史への関心を強める様々な活動が始められるべきであろうと考える。もちろん、歴史は一夜にしては作られない。歴史を語る資料が後世に残っていかなければならない。当面の資料保存はスーパースターであった科学者の身辺のものの保存から始まるのは自然なことであろう。

ここでは日本の物理学の歴史についてのこうした活動の一端を紹介したいと思う。このような紹介をする意図の一つはいわゆる文系の人達にも今後は日本の科学の歴史にも目を向けて専門的に研究する人が現れることを希望するからである。また、政治、経済、社会、文化、などの歴史一般の中に科学が無視できない位置を占めてくることになるを考えるからでもある。これまでの取り組みは殆んど周辺の科学者の中からのものであり、うまく歴史一般の中に融合されていないと感じている。

歴史には正史などはなく、時代時代の問題意識を反映しつつ事実をひもといていくのであろう。「正史」自体が一つの歴史と化していくのである。このような観点に立って、未来に歴史をひもとく資料を保存するという観点で作業を進めなければならない。ある時代の価値観であり取り捨選択すべきではない。しかし、現実には各時代で優勢であった動きが資料として系統的に後世に残されることになるのは避けられない。これはどの分野の歴史においてもそうであろうが、とりわけ制度化された現代の科学においては評価が各時点で比較的規格化されるため一層その傾向が強くなる。従って現在のところ各時代で大きな存在であった科学者の残されたものを歴史資料として保存・公開する作業が進行している。

5. 物理学関係の歴史資料保存の現状

一言で科学の歴史といっても次のような様々な内容を指す。

学説の発展、文化・思想、技術・産業、教育制度、人物史

これらすべてが関連しているのが現実であり、それこそが歴史の妙味なのであろうと思う。そういう意味ではあえて分類する必要もないのであるが、とかくこれまでの科学の歴史のイメージが「学説」と「人物」に限られて受けとられている節があるので敢えて広がりを書いておきたいのである。

ここで物理学関係の歴史資料の活動の現状の一端を紹介する。

(イ) 日本物理学会物理学史資料委員会

ここでは歴史資料の情報交換と資料蒐集を行なって

いる。例えば、現在資料をある程度整理して研究家の利用に供するを行なっているものとして次のようなところがある。

お茶の水女子大女性文化研究センター（お茶の水女子大学）

坂田記念史料室（名古屋大学理学部）

仁科会館（岡山県浅口郡里庄町）

仁科記念文庫（仁科記念財団）

二戸市歴史民俗史料館（岩手県二戸市）

日本物理学会

物性研究史料室（東京大学物性研究所）

湯川記念館史料室（京都大学基礎物理学研究所）

この外に展示室として

朝永記念室（筑波大学）

がある。

「お茶大」ではフランスでキューリー達（二代目）と共に研究した核実験家の湯浅年子の資料を収集している。「坂田」は湯川秀樹の後輩の素粒子理論家坂田昌一の資料収集を中心に、物性理論家であった有山兼孝のものも含まれる。「仁科会館」は昭和初期に理化学研究所で原子物理の日本への導入に中心的な役割を果たした仁科芳雄の生家に残されていた資料を公開している。「仁科文庫」は理化学研究所に残された仁科の資料を管理している。「二戸市」には二戸市出身で日本での地球物理を始めた田中館愛橘の14000点の資料を有している。「物理学会」には学会の資料と寄贈されたノート類がある。「物性」には物性理論家の小谷正雄の資料、ヒアリング・テープ、等を中心に物性研究の歴史資料を収集している。

（ロ）湯川記念館史料室

1979年に開設したこの史料室の活動については、既に「静脩」1990年3月に牧 二郎、河辺六男氏が書いたことがある。河辺氏の努力でその後も整理が進んでいる。

中間子論発見当時と阪大時代の論文下書き、計算用紙などが一まとめとなった風呂敷包の発見からこの史料室創設の話が起こったのであった。その後整理された資料には、研究面だけでなく、京大教授としての終戦時の大学行政、戦後の占領軍との対応などの資料が含まれており興味深い¹⁾。

（ハ）理研3号館仁科資料の内容一覧

旧理研3号館に仁科芳雄が亡くなった時に残され、その後捨てられずに残った資料を竹内 一氏を中心に整理した報告書が出されている。それによると資

料は次のようになっている²⁾。

分類	始番号	終番号
文献学習 1	1	68
文献学習 2	69	102
文献学習 3	103	149
相補性論文	150	165
Klein-Nishina 公式	166	218
教材	219	221
論文原稿・草稿	222	228
解説原稿・草稿	229	271
展示品	272	279
見学記その他	280	309
欧文書簡	310	509
事務的書簡など	510	568
和文書簡	569	1014
和文書簡ファイル中の案内などの非書簡	1015	1028

和文書簡には湯川、朝永の指導教官であった京大教授玉城嘉十郎が朝永振一郎の理研への就職の件で出した手紙なども含まれる。

（二）京都大学旧教養部所蔵実験機器

これは全国的にも貴重な京大が所蔵する歴史資料である。これについては整理にあたっている人達の文献を上げるにとどめる³⁾⁴⁾。現在も整理中であり、貴重な財産が多く、研究者や学生が目にする機会が作られることを希望する。

この資料の特徴は明治期の教育器具、実験器具、等であることである。自然科学の歴史資料としては文字資料だけでなくこうした器具の保存も大切であるということである。この点で現在を未来にどう残すかは実は全く新しい課題である。建物の改築・移転などの際に多くの実験研究者が悩みつつも過去の自作の機器も捨て去っている。

参考文献

- 1) 湯川記念館史料室発行
YHAL Resources Hideki Yukawa (I), (II), (III), (IV), (V)
- 2) 仁科記念文庫 「3号館仁科資料の内容一覧」
(1994年)
- 3) 永平孝雄、川合葉子、鉄尾実与資「明治19年以前の京都大学旧教養部旧蔵物理実験機器の分析」、科学史研究（岩波書店）、第3巻（1994年）129頁
- 4) 川合葉子「京都大学教養部図書館の明治期物理学関連図書に関する研究」（科研費報告書、1994年）